

Title	古ウイグル語文献にみえる「寧戎」とベゼクリク
Author(s)	松井, 太
Citation	内陸アジア言語の研究. 26 p.141-p.175
Issue Date	2011-08
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/50613">https://hdl.handle.net/11094/50613</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 古ウイグル語文献にみえる「寧戎」とベゼクリク

松 井 太

現在の中国新疆ウイグル自治区のベゼクリク (Bezeklik > 柏孜克里克～伯孜克里克) 石窟は、トゥルファン盆地のかつての主要城市だった高昌 (Uig. Qoço, 現在の高昌故城遺址) の仏教徒住民にとって、もっとも身近な仏教聖地であった。

周知の通り、このベゼクリクという呼称は、ウイグル語 Bezeklig 「絵／飾りのある (ところ)」に由来する。しかし、Peter Zieme 教授のご教示によれば、10～14世紀の古ウイグル語文献における Bezeklig ~ Bezeklik の在証例は、Annemarie von Gabain と Reşid Rahmeti Arat によってほぼ同時に紹介された草書体の頭韻四行詩の1例のみである：U 558, fol 16, „başäk-ligtä qız-lar qırqın bärtär-lärmü köngülin 「Başäklig の娘たち・婢たちは、引き裂くのか、その心を」。ただし、この başäk-lig (~ bäsäk-lik) について、Arat は「装飾、装飾された土地、装飾のあるところ」に由来する地名の可能性を提示しつつも、訳文としては「後宮、ハレム (harem)」を採用した [ETŞ, pp. 251-253, 421]。一方、Gabain は “(in ihrer) Pracht” 「(彼女たちの) 輝き、荘厳」と解釈し、固有名詞とはみていない [Gabain 1964, pp. 216-217]。すなわち、この başäk-lig の在証例とベゼクリク石窟との関係はなお解明されていない。換言すれば、現在のベゼクリク石窟が、古ウイグル語でどのように呼ばれていたかは、歴史地理学上の一つの問題といえる。

ところで、古ウイグル語文献資料には、NYZWNK = Nižüng または NYSWNK = Nišüng, さらには LYSWNK = Lišüng と判読できる術語が散見する。本稿では、これらの Nižüng ~ Nišüng ~ Lišüng という術語が、現在のベゼクリク石窟をさす

漢語の地名「寧戎」のウイグル音写形式であることを論証<sup>(1)</sup>、あわせて関連資料の歴史地理学的分析を試みる。

## 1. ベゼクリク壁画銘文中の NYSWNK ~ LYSWNK

本節では、ベゼクリク石窟から発現したことが判明している壁画に記されたウイグル語銘文の校訂テキストを提示しつつ、そこに在証される NYSWNK ~ LYSWNK の用例について検討する。

### 資料 (A) MIK III 8453 [Figs. A1, A2]

Grünwedel 番号ベゼクリク第 8 窟（現在の第 18 窟）から、ドイツ・トゥルファン探検隊によって将来されたものであり、現在はドイツ・ベルリン国立アジア美術館 (Museum für Asiatische Kunst) に所蔵されている。現存部分の大半を占める壁画の下部は地獄道を詳細に描写し、上半部には六道中の残る五道を図示する。中央上部にあったはずの天上道は缺けるものの、右側上端の人間道・畜生道、左側上端の阿修羅道・餓鬼道は確認できる [Fig. A1]。Le Coq 以来、<sup>(2)</sup>多くの図録により公刊されている。

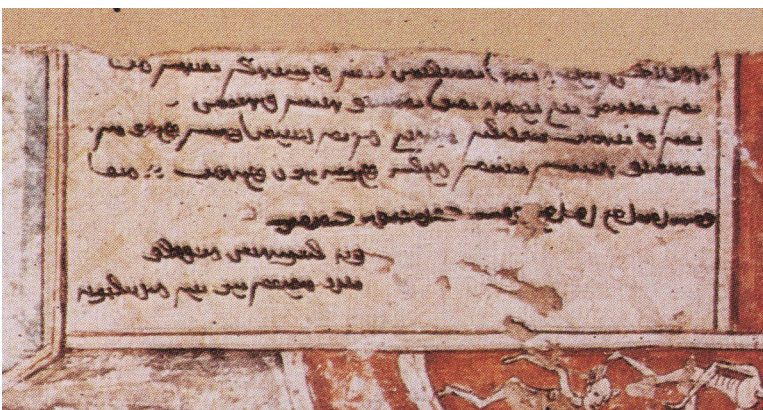
本稿で問題とするのは、現存部分の左上部分の枠内 [Fig. A2] にみえる 7 行の草書体ウイグル語銘文である。この銘文は、すでに Zieme により頭韻四行詩として校訂されているので [BT XIII, Nr. 59]、本稿ではそれに若干の訂正を加えたテキストを提示する。

- 
- (1) 筆者と独立して、Zieme 教授も同一の見解に達しておられたことを、私信により知り得た。また Zieme 教授からは、本稿の資料 (B)・(C) の校訂研究 [Zieme, forthcoming] を原稿段階で利用することをお許しいただき、あわせて本稿の成稿に際しても多岐に亘りご教示を頂戴した。ここに特記して深甚の謝意を示すと共に、本稿の内容に関する責任はすべて筆者にあることを申し添える。
- (2) BSA IV, Tafel 19; 松本栄一『燉煌画の研究・図像篇』東方文化学院東京研究所, 1937, pp. 415-416, fig. 108; 『中國新疆壁畫全集 6・吐峪溝・柏孜克里克』遼寧美術出版社・遼寧美術攝影出版社, 1996, 図 99; M. Yaldız et al. (eds.), *Magische Götterwelten. Werke aus dem Museum für Indische Kunst Berlin*, Berlin, 2000, pp. 218-219; cf. ABK, p. 258.

Fig. A1



Fig. A2



MIK III 8453 (Museum für Asiatische Kunst, Berlin)

『中國新疆壁畫全集 6・吐峪溝・柏孜克里克』遼寧美術出版社・遼寧美術攝影出版社，1996，圖 99

- 1           sukavadi uluř-nung oqıdıyı ona bu manisdan öřän-tä  
 2           on uyğur il uluř-nung uyrayı soqa basruqı •  
 3           ona bu NYSWNK aryadan qısıl-ta on küçlüg burxan bolıy-qa •  
 4           uyrayı soqa avant tılday bulmaq-lar-ı bolşun :: tip  
 5           burxan köngül köngül burxan yūkünürbiz yūkünürmān  
 6                           biz darmařiri taypodu  
 7                           iki qulut-lar ilā tāgındimiz

①浄土の誦。まさにこの寺院の中芯で、②十ウイグル国の確かな統制（と）、③まさにこの NYSWNK 阿蘭若の峡谷で、十力の仏となるために、④適合の因縁を得ることとなれ、と、⑥我々、ダルマシリ・タイポドウの⑦両名が添書し奉った。

⑤仏 心 心 仏（に）私達は敬礼し、私は敬礼いたします。

【語註】 **A2, on uyğur:** この「十ウイグル；十姓ウイグル」という表現の在証例については、Hamilton 1962; BT V, pp. 64-65; BT XIII, note 59.3; BT XXVI, pp. 198, 227, 249. また、この「十ウイグル」はトクズ＝オグズ (Toquz-Oğuz) 「九姓」を構成する 9 つの遊牧集団の 1 つとしてのウイグルをさすもので、それが 10 の下位遊牧集団により構成されたことを示すと考えられる [安部 1955, pp. 272-275; 片山 1981, pp. 47, 55]. **A2, uyrayı soqa:** Zieme も指摘するように、本処の第 4 行でも、後者の soqa の字形は SY(.)X' のようにみえる。 **A2, basruqı:** Uig. basruq ~ basuruq は v. basur- “to press down, weigh down” からの派生語であり、Zieme は疑問符つきで「庇護 (Stütze)」と訳した [BT XIII, note 59.4]. 一方、庄垣内正弘は、『観音経相应譬喻』にみえる用例を「制圧」と和訳している [庄垣内 1982, p. 317]. これらをふまえつつ、basruq (~ basroq) を “stabilizer” という方向で解釈すべきであるという Erdal の説 [OTWF, pp. 229-230] に従い、ここでは「統制」と試訳する。 **A3, NYSWNK:** 語頭の N- の左側には 1 点が

加えられているとみてよい。Zieme は *ništa* と転写して Skt. *niṣṭhā* 「優れた (hervorragend)」の借用語とみなしつつも、資料 (B) の用例から *iṣung* ~ *iṣūng* という転写の可能性も指摘した [BT XIII, note 59.5]。この銘文では、語末の aleph のストロークは右方向に払われる傾向があるので (e.g., <sub>13</sub>ona, <sub>3</sub>-ta, <sub>7</sub>ilä ; <sub>1</sub>-tä が下方方向に伸びるのは行末の埋め草)、語末部分は -T' ではなく -WNK と読むべきである。A5: この行は乱雑な別筆で書かれており、再構形は BT XIII, Nr. 59 の校訂に従う。行末の *yükünürmān* は、実際には YWKW(.)MN と書かれている。A6: *Darmaširi* は Skt. *Dharmaśrī* に、*Taypodu* は Chin. 大宝奴に由来する人名。

## 資料 (B) ダーキニー (*dākinī*) 像 [Figs. B1, B2]

Grünwedel 番号ベゼクリク第 9 窟側堂 (現在の第 21 窟) から、ドイツ・トゥルファン探検隊によって将来されたものの、第二次大戦中に紛失し、現存しない。ただし、Le Coq が刊行した写真 [*Chotscho*, Taf. 34] が<sup>3)</sup>、多数の図録集に複製出版されている。

ダーキニーの左脚の向かって右側に草書体ウイグル字銘文 4 行と漢文 1 行、また上半身の向かって右側に同筆の草書体ウイグル字銘文 4 行がある。いずれも、やはり Zieme により頭韻四行詩として校訂された [BT XIII, Nr. 60a+60b]。ここでとりあげるのは、Nr. 60a の部分である [Fig. B2]。

- |   |                               |
|---|-------------------------------|
| 1 | <i>sašimsiz kōngül öriḍip</i> |
| 2 | <i>sačuq kōngül yoqaḍip</i>   |

(3) 村上真完『誓願図の研究』第三文明社, 1984, p. 68; 新疆維吾爾自治區博物館 (編)『吐魯番伯孜克里克石窟』新疆人民出版社・上海人民美術出版社, 1989, 付図 17; 孫大衛 (編)『新疆石窟藝術』新疆攝影藝術出版社, 1989, 図 152 (但し、主題を『本生故事』とするのは何らかの誤解); 吐魯番地區文物管理所 (編)『吐魯番伯孜克里克石窟壁畫藝術』新疆人民出版社, 1990, p. 49; 『中國壁畫全集・新疆 6・吐魯番』遼寧美術出版社・新疆人民出版社, 1990, 図 96; 『中國新疆壁畫全集 6・吐峪溝・柏孜克里克』遼寧美術出版社・遼寧美術攝影出版社, 1996, 図 96。

- 3 sar[v]arḍsdi tigin tæg qaḍıylanıp  
 4 säri[l]ip olurzun-lar bu NYSWNK-T' tip  
 5 我達摩實囉弟子寫矣 ::

①不乱心を発し、②散乱心を滅し、③一切義成王子の如く精進して、  
 ④この NYSWNK で（修行に）耐えているように、と、⑤私ダル  
 マシラ（ダルマシリ？）弟子が書いた。

**【語註】 B1, sašimsöz kəngül:** 「不乱心 (Skt. avikṣipta-citta)」。 **B2, sačuq kəngül:** 「散乱心 (Skt. vikṣipta-citta)」。**B3, sar[v]arḍsdi:** < Skt. Sarvārtha-siddha 「一切義成王子」。BT XIII, Nr. 60a では srv[']arḍsdi と読まれた。

**B4, säri[l]ip:** < v. säril- 「耐える」。Zieme 氏は BT XIII では säril- を採ったものの、現在は、後舌音の sa- で頭韻を踏むという観点から sarilip < v. säril- “to be wrapped” という推補を念頭に置いているとのことである [Zieme, forthcoming; cf. ED, p. 851]。ただし、銘文の全体的な文脈には、「（修行に）耐える」という旧案のほうが適するように思われる。なお、漢文仏典の「耐える；忍ぶ」に対するウイグル語としては säril- / särin- の双方がある [庄垣内 2008, p. 636]。本処では -l- の筆画は破損のため確認できないので, säri[n]ip と推補することもあるかもしれない。**B4, NYSWNK:** かつて Zieme は isüng ~ isung と転写し、コータン語のいわゆる Staël-Holstein 文書にみえる地名 'isumä ~ yūsumä との関係性を推測した [BT XIII, note 60.4]。しかし、現在では筆者と同様に NYSWNK と改めるべきという見解に達したとのことである [Zieme, forthcoming]。

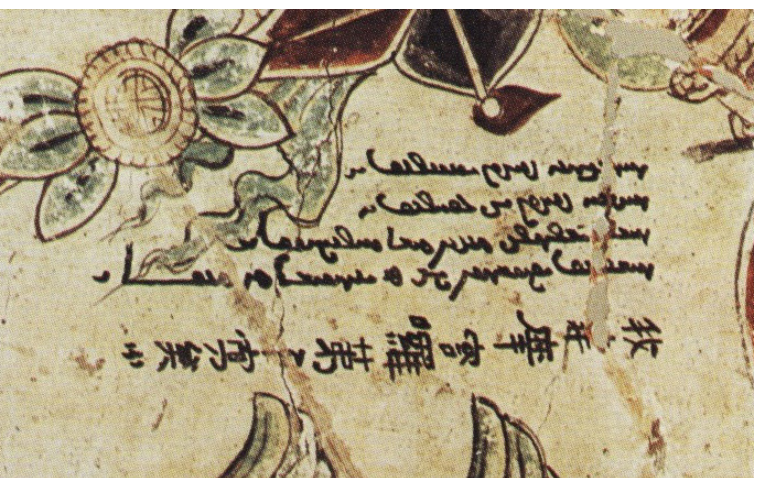
**B5:** 稚拙な漢字で書かれていることから、この漢文の書き手はウイグル人であり、「我……弟子寫矣」という漢文は第 4 行末の tip「〜と」をうけて、ウイグル語で「私、……弟子が書いた (män . . . . tisi bitidim)」と訓読されていたであろう。弟子の「子」は若干破損しているが、十分に判読可能である。「弟子」に先行する人名は明らかに非漢語名の漢字音写であり、Le Coq は Dhar-ma-mit(?)-ra というサンスクリッ



Fig. B1



Fig. B2



Dakini from Bezeklik Cave No. 9 (today No. 21)

『中國新疆壁畫全集 6・吐峪溝・柏孜克里克』遼寧美術出版社・遼寧美術攝影出版社，1996，圖 96



ト語名を復元した。おそらく、漢字を「達摩密(?)囉」<sup>(4)</sup>と読んだのであろう。しかし、変体の俗字で書かれて判読が難しい第3字を「實」と読み、「達摩實囉」という表記から \*Darmašila (< Skt. Dharmaśīla) というウイグル語人名を想定することも可能のように思われる。さらに、この資料(B)と同じく Grünwedel 番号第9窟から将来された次掲の資料(C)にも、タイポドゥ (Taypodu)・ダルマシリ (Darmaširi) という巡礼者が銘文の書き手として言及される。彼らが資料(A)の書き手と同一人物であることは、発現地点が近接することからみて、ほぼ確実である[語註C1参照]。推測に推測を重ねる危険があるものの、筆者は、この資料(B)の書き手である「達摩實囉」も、資料(A)・(C)の書き手の一人ダルマシリ (Darmaširi) と同一人物であって、人名の後半の「實囉 (< śīla)」は何らかの誤記(例えば「實理 (< širi)」)の可能性が高いと考えている。

### 資料(C) Hermitage, TU-532 [Figs. C1, C2]

1909～1910年の間にロシアの Sergej Ol'denburg 探検隊によってベゼクリク石窟から将来されたもので、現在はエルミタージュ博物館に所蔵されている。出土地点は、Ol'denburg 番号の第40窟と報告されており[Zhang / Rudova / Pčelin 2007, p. 427]、Zieme 氏のご教示によれば、この窟は Grünwedel 番号第9窟に相当するという。

主人公の婆羅門の背後(向かって左側)一面に、書き手や書かれた時期を異にする多数の草書体ウイグル語銘文がある。図版が刊行されているものの<sup>(5)</sup>、これまでその銘文についての校訂研究はなかった。現在、Zieme 氏が包括的な校訂テキストを準備中である[Zieme, forthcoming]。本稿で問題となるのは、

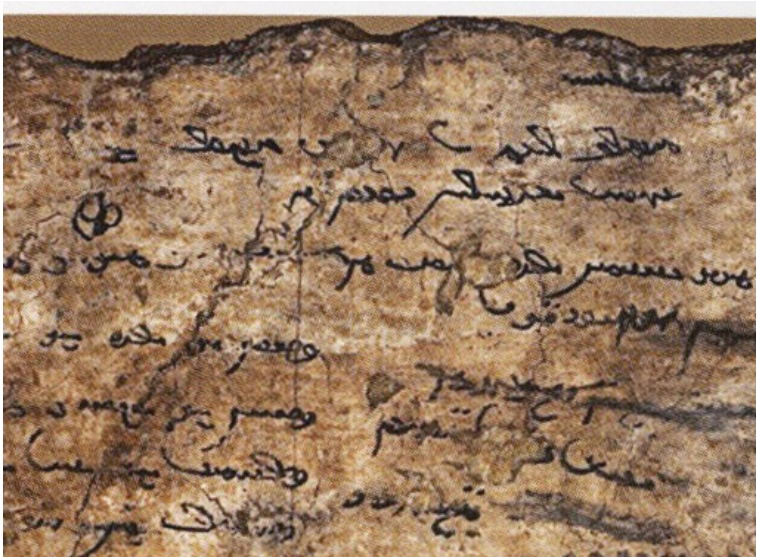
(4) Cf. 勒柯克 (A. von Le Coq), 趙崇民 (譯)『高昌:吐魯番古代藝術珍品』新疆人民出版社, 1998, p. 112.

(5) 五木寛之・NHK取材班(編)『スキタイとシルクロードの文化』(NHKエルミタージュ美術館4)日本放送出版協会, 1989, pl. 136; D. J. Roxburgh (ed.), *Turks. A Journey of a Thousand Years, 600-1600*. London, 2005, p. 52; PTB, pl. 153.

Fig. C1



Fig. C2



TU-532 (State Hermitage, St. Petersburg)  
After PTB, pl. 153

Zieme が Section 2 とした、婆羅門の右腕の左側一面に記される銘文の冒頭部分である **【Fig. C2】**.

- 1            taypodu dr̥m-a širi quluḍ-[lar ](..)[    ]  
2            NYSWNK ḡran-yadan orun-(t)a [    ]

① タイポドゥ・ダルマシリの奴僕 [たちが……]

② NYSWNK 阿蘭若の居所で……

**【語註】 C1, taypodu dr̥m-a širi:** いずれも資料 (A) の登場人物と同一であることは確実である [語註 B5 参照].    **C2, ḡran-yadan:** < Skt. araṇya 「阿蘭若」すなわち「(修行に適した) 森林; 寂静処, 遠離処」. ここでは Zieme (forthcoming) による転写を採用したが, ar-yadan ~ aryadan と読むことも可能かもしれない.

#### 資料 (D) Hermitage, VD-813 **【Figs. D1, D2】**

Grünwedel 番号ベゼクリク第 4 窟 (現在の第 15 窟) から, ドイツ探検隊により将来されたもので, 誓願図の一部を構成していた供養人像である. 第二次大戦後に旧ソ連によってベルリンから持ち去られ, 現在はエルミタージュ美術館に保管されている. 2008 年に開催された展覧会で一般公開され, そのカタログにより写真も刊行された [PTB, pl. 332]. 供養人像の向かって左側の白い枠線のなかに草書体のウイグル語銘文 1 行が記される. その冒頭部は塗抹されていて判読できない. ここで問題となるのは後半部分である **【Fig. D2】**.

[    ](W) bir ygr̥minč ay bir yang̃ıqa LYSWNK-kā ärtintimiz bükün altı yang̃ıqa (..) …… 第十一月初 (旬の) 一日に, 私達は LYSWNK に立ち寄った. 今日 (即ち) 初 (旬の) 六日に……



**Fig. D1**



**VD-813 (State Hermitage, St. Petersburg)**

After PTB, pl. 332

**Fig. D2**



【語註】 冒頭の文字残画 -W はやや墨が薄くて文字も小さく、後続の銘文とは無関係であろう。Uig. ärtintimiz < v. \*ärtin- については、v. ärt- “to pass” の再帰形と考えて “to come over” の意とみなすべきというご教示を Zieme 氏から頂戴したので、それに従いたい。

さて、資料(A)の「この NYSWNK 阿蘭若の峡谷で (bu NYSWNK aryadan qīsīl-ta)」、資料(B)の「この NYSWNK で (bu NYSWNK-T')」という表現は、いずれも、それぞれの銘文が書かれた地点に言及するものである。Uig. qīsīl の原義は「峡谷、溪谷」であるが、ウイグル語文献には Tiyoq qīsīl 「トヨク峡谷」や Muruđtuq qīzīl 「ムルトウク峡谷」など、石窟寺院の集中する峡谷の名称に付して用いられる例がある [松井 2004b, p. 62, fn. 18; cf. 後掲資料(H)]。また、資料(A)・(C)の「NYSWNK 阿蘭若 (aryadan ~ aranyadan)」という表現は、この NYSWNK が「阿蘭若 (仏教の修行に適した寂静処)」すなわち仏教寺院施設の名称でもあったことを示している。そして、資料(A)・(B)・(C)は、いずれもベゼクリク石窟から将来された壁画である。以上の諸点に鑑みれば、これらの資料中にみえる「NYSWNK ; NYSWNK 阿蘭若」が、天山山脈の前山である火焰山中、ムルトウク河の峡谷地帯に位置するベゼクリク石窟寺院 (群) をさしていたことは明らかである。

ここで想起すべきは、敦煌出土漢文文書「西州図経残卷」(P. 2009)に「寧戎窟寺一所、右在前庭縣界山北廿二里寧戎谷中」と記されるように、ベゼクリク石窟寺院が唐代以前には「寧戎窟；寧戎窟寺」と呼ばれていたことである [柳洪亮 1986, p. 58; 百濟 1994, p. 4]。そこで筆者は、資料(A)～(C)の NYSWNK を Nišüng と転写し、漢語の地名「寧戎」(中古音 \*nieng-ńźjüng : GSR 837a + 1013d) に由来するものとする。いわゆる「ウイグル漢字音」の研究からは、漢語「寧」は NY = ni (~ ne) と音写されたことが確認されており [庄垣内 1987, pp. 30, 54, 130]、「戎」(如融切)も ZWNK = žüng あるいは SWNK = šüng と音写されたと推定される [庄垣内 1987, pp. 36-37, 50; 庄垣内 2003,



pp. 61-62, 94-95]. 実際に、後掲の西ウイグル時代の資料 (E) には NYZWNK = Nižüng という形式もみえるので、早期の段階では寧戎がウイグル語で Nižüng と音写されたことは確実である<sup>(6)</sup>。これに対し、前掲の資料 (A) ~ (C) (さらに後掲の資料 (G)) は、いずれも草書体で書かれていることから、ほぼ確実に 13 ~ 14 世紀のモンゴル時代に比定できる。これらの資料で NYSWNK = Nišüng と表記されるのは、地名としての「寧戎」がウイグル語に定着して年代を経るとともに、本来のウイグル語に無かった /ʒ/ 音がウイグル語固有の /ʃ/ 音に変化したことを反映するものと考えておく<sup>(7)</sup>。

一方、資料 (D) の銘文の書き手たちは、某年十一月一日に「LYSWNK に立ち寄り、その 5 日後の「今日 (即ち) 初 (旬の) 六日に」、この銘文をベゼクリク第 4 窟に書き残して出発したものと推定できる。ベゼクリク石窟や敦煌莫高窟・安西榆林窟など、中央アジア地域の仏教石窟に遺されたウイグル語銘文の多くは、それらの石窟を訪問した巡礼者による記念の銘文であった [e.g., Hamilton / Niu 1998; Matsui 2008b]。この点に鑑みれば、本銘文の書き手たちが「立ち寄った」という LYSWNK も、仏教聖地としてのベゼクリク石窟そのものをさすと考えられる。そこで筆者は、資料 (D) の LYSWNK を Lišüng と転写し、Nišüng = 寧戎の変異形式とみなしたい。語頭の N- 音が L- 音に変化する現象は、ラプチュク (Lapčūq > Chin. 拉布楚喀) やロブ (Lop > Chin. 羅布) など、タリム盆地内の他の地名にも確認されているからである<sup>(8)</sup>。

(6) 「戎」と同音の「絨」を含む「絨錦」が ZWYNKYM = žüngim ~ žünkim (< \*žüng-kim) と音写された例 [森安 1991, p. 91; 森安 1997, p. 22] も参考になる。

(7) 吉田 1994, pp. 320, 309; Yoshida 2000, pp. 6-7; Erdal 2004, p. 83; 橋本 2004, pp. 32-33; 吉田 2009, pp. 58-59. 一方、庄垣内はつとに /ʒ/ > /ʃ/ の発展を指摘したが、近年の研究では日母を音写した Z, S, Š が /ʒ/ 音の範疇にあったとする [庄垣内 1987, p. 37; 庄垣内 2003, pp. 61-62]。この /ʒ/ > /ʃ/ の交替については、Chin. 閩 \*nǐjuǎn (GSR 1251o) > Uig. ZWN = žün が、西暦 14 世紀初頭に成立したペルシア語史料『集史』では ŠWN = šün と借用されていることも考慮できる [松井 1998, pp. 14-15]。

(8) Sogd. \*Nop-čik > Chin. 納職 \*nâp-tšjak > Uig. Napčik > \*Lapčiq ~ \*Lapčūq > Chin. 臘竺 ~ NUig. Lapčūq ~ Chin. 拉布楚喀; Sogd. \*Nop > Tib. Nob ~ Uig. Nop > Uig. \*Lop ~ Chin. 羅卜 ~ 羅不 ~ Lat. Lop > Chin. 羅布. Cf. 森安 1990, pp. 79-80; Matsui 2008b, p. 20.

## 2. その他の在証例をめぐる諸問題

前節では、ウイグル語地名 Nižüng ~ Nišüng ~ Lišüng を「寧戎」の音写とみて、ベゼクリク石窟に比定した。この比定に基づいて、これらの地名が在証されるウイグル語世俗文書の内容理解、さらにはそれらの文書の作成・発現地点に関する歴史地理学的問題に、いくつかの解答を与えることができる。以下に、関係する資料を提示しつつ検討を加えたい。

### 資料 (E) K 7717

黄文弼の率いた西北科学考察団によってヤールホト (Yar-khoto, 交河故城) で発見され、現在は中国北京の中国国家博物館 (かつての中国歴史博物館) に所蔵されている。黄文弼『吐魯番考古記』(科学出版社, 1954) 図 80 に写真複製が公刊され、森安孝夫により校訂テキストが提示されている。森安は、本文書が半楷書体で書かれていること、また文書に在証される <sub>20</sub>[m]a[n](i)stan 「寺院; マニ寺」や <sub>9</sub>qoštr, <sub>10</sub>šaxan などの術語・称号、また文書冒頭の「高昌をはじめ東西の諸城……小作料 (である) 主穀 (= 小麦) とキビの……を私達は書いた (qočo başlap öngdün [ki]din baliq-lar [...y]aqa-ları tariy (ü)[ür ...](.) KWT-in bitidimz)」という標題やそれに続く内容から、西ウイグル時代のマニ教寺院で作成された入暦 (もしくはその原簿) と考えた [森安 1991, pp. 85-87; Moriyasu 2004, pp. 105-108].

文書には、マニ教寺院に収められる小作料の来源として、小作地の所在地名や小作人の人名が記される。注目すべきは、その中に寧戎 (Nižüng) がみえることである。

13            [    ]-T' bayiq-tin nižüngdäki örü tam ya(qası)(..)[            ]  
                 ..... Bayiq から、寧戎に在るオル＝タムの小作料……

ここにみえる nižüng について、森安は、当初は 'YZWNK と翻字し、のち

の独訳版では NYZWNK と改めるにとどまった。しかし、本稿でこれまで提示してきた在証例に鑑みれば、この NYZWNK を Nižüng と再構して寧戎の音写とみることに問題はない。管見の限り、西ウイグル時代に属する本文書の Nižüng は寧戎のウイグル語音写として最も古く、2点の付された Z により「戎」の /ʒ/ 音が明示されている点も留意される。

残念ながら、本文書の「寧戎 (Nižüng)」の前後の文脈は缺落のため不明瞭であり、森安も十分な転写・解釈を提示していない。かりに筆者は、直前の Bayiq を小作料 (ya(qasī) < yaqa; この再構は妥当である) を支払う人名とみなし、また後続するオル＝タム (örü tam, 原義は「上手／北側の壁／墻垣」；森安は 'WYNW T'M と翻字したのみ) は「寧戎」近辺の地点名と考えたが、他の解釈を排除するものではない。

なお、「寧戎」という地名は、高昌国時代には県名 (寧戎県)、唐代には郷名 (寧戎郷) としても用いられた。すなわち、「寧戎窟；寧戎窟寺；寧戎阿蘭若」のような寺院としての名称ではなく、単に「寧戎」という場合には、ベゼクリク石窟ではなく、行政区画・村落としての寧戎県・寧戎郷をさした可能性もある。従って、ベゼクリク以外の地点から将来されたウイグル語文献中に「寧戎 (Nižüng ~ Nišüng ~ Lišüng)」が単独でみえる場合、それがベゼクリク石窟をさすものとは即断できない。本文書の「寧戎 (Nižüng)」も、ここに出租されるだけの規模の農地があったとすれば、ベゼクリク石窟直近の渓谷中に所在したとは考えづらい。ベゼクリク石窟から若干離れた、唐代の寧戎郷に相当する村落であった可能性も残る。寧戎県・寧戎郷の所在地については、高昌故城から北方約 8 km の、火焰山中の峡谷に分け入っていく入口にあたるセンギム＝アギズ (Sänggim-aghiz > Chin. 勝金口) に比定する荒川正晴・榮新江の〔荒川<sup>(9)</sup> 1986, p. 68; 榮新江 1987, p. 40〕が有力である。

(9) 荒川が論拠としたのは、本文で上述した「西州図経残巻」の「寧戎窟寺一所、右在前庭縣界山北廿二里寧戎谷中」、および大谷文書中の唐代均田制関係文書 (Ot. Ry. 2872; Ot. Ry 3377) の「(高昌) 城北廿里寧戎 (低) 苦具谷」という記事である。後者の「寧戎」は「城北廿里」つまり高昌城の北方約 8 km に位置したというから、

ちなみに、本文書中には、標題の高昌 (Qočo) の他にも、マニ教寺院が小作地を所有していた地名が散見する。第4行のブカプチ (Buqapči) は、SUK Mi25 に在証されるブカパチ = キラ (<sub>9</sub>Buqapači-qīra: qīra は「原, 草地, 休耕地」) と同地とみてよかろう。SUK Mi25 は「高昌にある田地 (<sub>2,3</sub>Qočo-taqi yir)」の譲渡に関する契約なので、Buqapči ~ Buqapači は高昌城内もしくはごく直近にあった地名ということになる<sup>(10)</sup>。第12行の「トゥラ村 (Tura suzaq)」の原義は「砦の村」[ED, p. 531] であり、現地比定については成案がない。第18行のコングツィル (Qongdsir = XWNKDSYR) は、モンゴル時代のウイグル語帳簿様文書 \*U 9196 に「コングシルの人々たちの喜捨 (<sub>42,43</sub>Qongsir-līy-lar-ning lab)」[Sertkaya 2006a, pp. 131-132; VOHD 13,22 #306], また西暦 1352 年のチャガタイ

---

↘ ベゼクリク石窟よりはむしろセンギム = アギズに比定するのが妥当である。一方、荒川は、前者の「寧戎窟寺」についても「(高昌から) 廿二里」という距離からセンギム = アギズに比定した。本文資料 (F) の項で述べるように、センギム = アギズにも仏教寺院が存在したことは確実である。ただし、筆者は、「西州図経残卷」の「縣界山北廿二里」を「(前庭 = 高昌) 県の境界となる山から北方へ二十二里」、すなわち「火焰山の峡谷に分け入っていくあたり (具体的にはセンギム = アギズにほぼ相当する) を基点として北方へ二十二里」と理解して、「寧戎窟寺」をベゼクリク石窟に比定することも可能と考える (センギム = アギズからベゼクリク石窟までの距離はムルトウク河に沿って約 7 ~ 8 km である)。センギム = アギズにも仏教石窟はあったが、石窟の規模に鑑みれば、あえて「窟寺」と称されるのはベゼクリク石窟の方がふさわしい。ちなみに、荒川・榮新江に対して、王素は、麹氏高昌国時代・唐代の新興をセンギム = アギズに比定し、寧戎についてはムルトウク溪谷を北上した勝金台に比定する説を支持している [王素 2000, pp. 69, 71]。しかし、新興を現在のセンギム = 勝金に比定することは、地理的環境からも確定的である。特に、13 ~ 14 世紀のウイグル語文献にも「新興 (Singging) の大きな湖」という表現がみえ、これが現在のセンギム近郊のチッカ = クル (Čiqqan-köl > Chin. 七康湖) とみられることも、新興 = センギムの比定を傍証する。拙稿 [松井 1998, pp. 33-34; 松井 2010b] および後述本文を参照。

(10) その他、SUK Mi25 にみえる地名シカプ (<sub>4</sub>Sīqap), チャクチャク (<sub>5</sub>Čaqčaq), ヨル = トガン (<sub>8</sub>Yol-Toγan) は、いずれもいわゆるカイムトゥ (Qayimtu) 文書 (SUK RH08, RH05, RH07) で貸借される田地の所在地として在証されており、高昌の城内もしくは直近にあったと考えられる [山田 1976, p. 44; cf. Zieme 1980, p. 213; Matsui 2007, p. 64].

= ウルス発行モンゴル語文書 (BT XVI, Nr. 70) に「ソイム・コングシル・リムチンの3集落 (<sub>5,6</sub>S[oim] Qongsir Limčin ekiten γurban silteged)」とみえる地名コングシル (Qongsir = QWNKSYR) と明らかに同地であり、筆者はこれを高昌国時代・唐代の横截 \*γwǝng-dz'iet (GSR 707m + 310b) の音写と考える。一般的に、横截の所在については、現在のレムジン (Lämjin > 連木沁) 鎮の東方に位置するハンドウ (Khandu, 漢墩) に比定する嶋崎昌の説が支持されているが [嶋崎 1959 = 嶋崎 1983, pp. 120-122; 荒川 1986, p. 40; 王素 2000, pp. 61-62], その論拠は横截の中古音と現在のハンドウの発音が近似するというもので、音韻的に十分といえるものではなかった。しかしながら、前述のモンゴル語文書 BT XVI, Nr. 71 で Qongsir と併記される集落名リムチン (Limčin = LYMČYN) が、現在のレムジンの原形である唐代の臨川 \*ljam-tś'jwān (GSR 669e + 462a) [嶋崎 1959 = 嶋崎 1983, p. 132; 王素 2000, pp. 72-73] の音写であることは明白である。すなわち、Qongsir ~ Qongdsir < 横截は Limčin < 臨川に近接していたことになるので、横截 = ハンドウの比定も補強できる<sup>(11)</sup>。最後に、資料 (E) の第 16 行で「大きな

(11) 截 (昨結切) がウイグル字で DSYR ~ \*TSYR = tsir とともに SYR = sir とともに音写される理由は、漢語のウイグル音写では歯頭音の /ts/ が /s/ に交替すること [吉田 1994, p. 318] に求められる。一方、横のウイグル漢字音は XW = qo であるから [庄垣内 2003, pp. 92-93, 135], 地名としての横截 > Qongdsir ~ Qongtsir ~ Qongsir は、字音化が生じる以前にウイグル語に定着していたものと考えられる。ちなみに、敦煌出土のコータン語 Staël-Holstein 文書は、ピチャン (Pichan, 現在の鄯善: Khot. phūcānā < Chin. 蒲昌) とルクチュン (魯克沁 < Lukčün < Uig. Lükčüng ~ Khot. dūkācū < Chin. 柳中) との間に位置するものとして、hve'tsverä という地名を挙げる。従来の研究では不明とされているものの [e.g., Hamilton 1958, p. 142], 筆者は、この hve'tsverä を横截に比定できると考える。Khot. hve' は Chin. 横の河西方言音 \*xwäi' を反映するものであり、同文書の hve'dū < 横堆という例を参照できる [Hamilton 1958, p. 128; cf. 高田 1988a, p. 75; 高田 1988b, p. 402]。また、吉田豊氏のご教示によれば、截 > tsverä の -v- 字は不自然ではあるが、先行する横 > hve' の影響で \*tserä が tsverä に同化したものと説明できるという。このような、漢語の地名のウイグル語音写形式と、ウイグル漢字音 (および河西方言音やコータン語音写形式) とが対応しない現象は、脚註 8 で言及した Chin. 納職 > Uig. Napčik ~ Khot. dapäci の例にもあてはまる [森安 1990, p. 79; 吉田 1994, pp. 307-306, 286 (n. 16)].



湖の水の売価(?) (uluγ köl-nüng suv satı[γi(?) ....])<sup>(12)</sup>」と推補できる箇所は、直接に地名は挙げられていないものの、ウイグル契 SUK WP04<sub>20</sub> の「新興の大きな湖 (Singging-tä uluγ köl) で灌漑される (田地)」との関連を想起させる。この新興 (GSR 382k + 889a, \*sǝñ-χǝng > Uig. Singing > Singging) は火焰山北麓のセンギム (勝金 < Sängim < Uig. Singging) に比定され、また「大きな湖 (uluγ köl)」はセンギム近郊の湖沼チックカン=クル (Čiqqan-köl > Chin. 七康湖) をさすと考えられる [松井 1998, pp. 33-34; 松井 2010b]。あるいは資料 (E) でもチックカン=クルの水利権に言及しているのかもしれない。

以上の点から、この資料 (E) は、ヤールホト (あるいは高昌) に位置したマニ教寺院が、寧戎 (Nižüng) や横截 (Qongtsir) など、火焰山北方の諸処に租佃地を有していたことを示すものであり、西ウイグル時代のマニ教寺院経済の規模や実態を考察するための材料となり得る。

## 資料 (F) U 5288 (T M 77, D 51)

14 世紀中葉～後半に年代比定されるウイグル文供出命令文書群「クトルグ印文書」の一つであり、現在はベルリン科学アカデミーに所蔵される。すでに拙稿で校訂テキスト・訳注を提示しているので [松井 1998, No. 4]、本稿では一部に補訂を加えた日本語訳のみを掲げる。

① 犬年第六月□日に、② ケドメン=ベグ (Kädmän-bäg)<sup>(13)</sup> のニシャン印  
 ……③ カヤが受領して行くべき…④ を、ブドウ園に…⑤ [太] 倉寺  
 の ([Ta]ysang vaxar-lıy) ブドウ園…⑥ ……ノムクリ=トゥガ<sup>1</sup> [升の蒸  
 留酒(?)]、ブヤン…⑦ =シャ、テュシュテムュルが合計 1 [升の] ⑧  
 蒸留酒 (araqi)。寺院の (manistan-lıy) ……⑨ のうち、チェチェグトゥ、

(12) 後半部の suv satı[γi(?)]「水の売価(?)」について、森安は S(.) STY[...] と翻字するのみにとどまったが、写真からも SWV = suv は判読できる。

(13) この人名 Kädmän は、旧稿の Kädmä を改めたものである [松井 2008a, p. 28]。

タシュ＝トレク，……⑩サルが合計 1 升 (saba)<sup>(14)</sup> の蒸留酒，……⑪のブドウ園からイシグ……⑫クム (砂?) 渠，キヴ (吉?) ブドウ園……⑬のうち，寧戎寺のブドウ園 (Lišüng vaxar-līγ b(o)[rluq]) ……⑭合計 1 升の蒸留酒，……⑮……ラムビ，トレク＝テミュル……⑯オグデユンとエリクが合計 1[升の] ⑰蒸留酒を，あわせて供出せよ。⑱アルグン＝カヤが 1，ブヤン＝テミュル……⑲ベグ＝カヤ，ブヤン＝トゥルミシュが合計……⑳升の蒸留酒を供出せよ。

まず，旧稿では [..]YSNK と翻字するにとどまった第 5 行冒頭の寺名は「[太倉寺 ([Taj]sang vaxar)」と推補して，やはりブドウ園と関連してウイグル契にしばしば在証される高昌近辺の地名「太倉 (Taysang ~ Taytsang)」と同じ地点にあったものとみる。その具体的な位置については，高昌城外の西北約 1.0 km に現存する「台藏塔」遺址 (Le Coq や Grünwedel のいう Taisang 仏塔) に比定する山田信夫の説 [山田 1968, p. 21]<sup>(15)</sup> を支持したい。一方，やはり旧稿 [松井

(14) 本来「皮袋」を意味する Uig.-Mong. saba は，モンゴル時代には Chin. 升 (≒ 0.84 リットル) に対応する液量単位としても用いられた [松井 2004a, pp. 166-163]。

(15) [Taj]sang の推補については Zieme 教授のご教示を得たので，あらためて謝意を表する。地名「太倉 (Taysang ~ Taydsang)」の在証例は下記の通り：SUK Sa11, <sub>3</sub>taysang-taqi <sub>4</sub>on altı är kömār borluq 「太倉 (Taysang) にある 16 人の男が耕作する (面積のある) ブドウ園」；SUK WP04, <sub>2,22</sub>taydsang-t(a)qi qum borluq-um 「太倉 (Taydsang) に帰属する私のクム (砂?) ブドウ園」；SUK Mi17, <sub>3</sub>qočo-taqi taysang borluq 「高昌にある太倉 (Taysang) ブドウ園」。これらの「太倉」もおそらく資料 (F) の「太倉寺 (Taysang vaxar)」の略称であり，この寺院は多数のブドウ園を寺産として所有していたと推測される。さらに，BT XXVI, Nr. 97 で <sub>3</sub>[ta]všang(?) aryadan と読まれている寺院名も，[Taj]sang aryadan 「太倉阿蘭若」と改めて，資料 (F) の「太倉寺 ([Taj]sang vaxar)」と同じ寺院をさすものとみなすことができる。なお，台藏塔遺址からは，近年の調査により多数の漢文仏教文献が発掘されている [榮新江・李肖・孟憲實 (編) 『新獲吐魯番出土文獻』下，中華書局，2008, pp. 258-270]。ちなみに，Uig. Taysang ~ Taytsang は Chin. 太倉 \*t'āi-ts'āng (GSR 317d + 703a) を借用したものであり，現在の台藏 (塔) という呼称はこのウイグル語形式を反映しているものであろう。ウイグル漢字音では台藏は Taytso ~ Tayso と表記されたはずであるが，Chin. 倉は早い段階で Uig. tsang ~ sang として定着しているからである [庄垣内 1987, pp. 53, 127; cf. Hamilton 1984, pp. 239-240]。

1998, p. 30] では明解を与えられなかった第 13 行の Lišüng vaxar は、いまや問題なく「寧戎寺」と解釈することができる。

文書下端の欠落のため、文脈を完全に復元することは困難であるが、本文書がウイグル住民および「太倉寺」・「寧戎寺」所有のブドウ園から蒸留酒 (araqī < Arab.-Pers. 'araq) を徴発するための行政文書であることは確実である。本文書は高昌故城から将来された可能性が高く [松井 1998, p. 6; cf. VOHD 13,21 #13], また高昌近郊の「太倉寺」が言及されることも考慮すると、おそらく高昌城内もしくはその近辺のブドウ園を所有するウイグル住民や仏教寺院から蒸留酒を徴発するために発行されたものであろう。

これらにまじって言及される「寧戎寺 (Lišüng vaxar)」は、もちろんベゼクリク石窟寺院をさしたものであった可能性が高いが<sup>(16)</sup>、資料 (E) でも述べたような村落としての「寧戎」の用例も考慮すると、高昌国時代・唐代の「寧戎 (県・郷)」すなわちセンギム＝アギズの近辺にあった寺院だった可能性も残る。20 世紀初頭にセンギム＝アギズを調査した Le Coq は、当地に合計 12 の寺院址があると報告しており [Chotscho, Tafn. 72, 73; Le Coq 1926, pp. 69-70 & Taf. 16], 資料 (F) の「寧戎寺」はそのうちの一つの寺院をさすか、あるいはこれらの寺院の総称であったのかもしれない。

これに伴い、その所有するブドウ園 (borluq) の所在地についても、種々の可能性を想定できる。第一には、もちろん寺院の所在地 (ベゼクリクもしくはセンギム＝アギズ) に付設された可能性である。唐代に遡るが、トヨク石窟 (吐峪 < Toyoq < Uig. Tīyoq < Chin. 丁谷) 出土の唐代漢文文書「唐西州下寧戎・丁谷等寺帖為供車牛事」(81SAT:2) では、「寧 [戎] 寺」と「丁谷寺」に車・牛を供出させることが命じられている [柳洪亮 1997, pp. 123, 363-365, 471; 也小紅 2006, pp. 214-215; 『吐魯番文物精粹』 p. 148 「西州乘牛帖」]. この漢文文書でも、「丁谷寺」が高昌から直線距離で約 15 km を隔てた仏教聖地である

(16) モンゴル時代のトヨク石窟に存在した abita qur vaxar ~ abita qur atly vaxar 「阿弥陀窟 (qur < Chin. 窟 \*k'uət) 寺」の例は、ウイグル語の vaxar ~ vraxar 「寺院」が石窟寺院の呼称としても用いられたことを示す [松井 2004b, pp. 66-67; Matsui 2010a, p. 704].

トヨク石窟所在の仏寺であったことは疑いないのに対し、「寧〔戎〕寺」がベゼクリク・センギム＝アギズのいずれに所在していたかは特定できない。とはいえ、西州＝高昌所在の行政機関は、ベゼクリクもしくはセンギム＝アギズの「寧戎寺」から、必要に応じて物資を徴発することが可能だったことになる。モンゴル時代の本資料(F)で言及される「寧戎寺 (Lišüng vaxar) のブドウ園」も、その点では同様の徴発を蒙っていた蓋然性は高い。

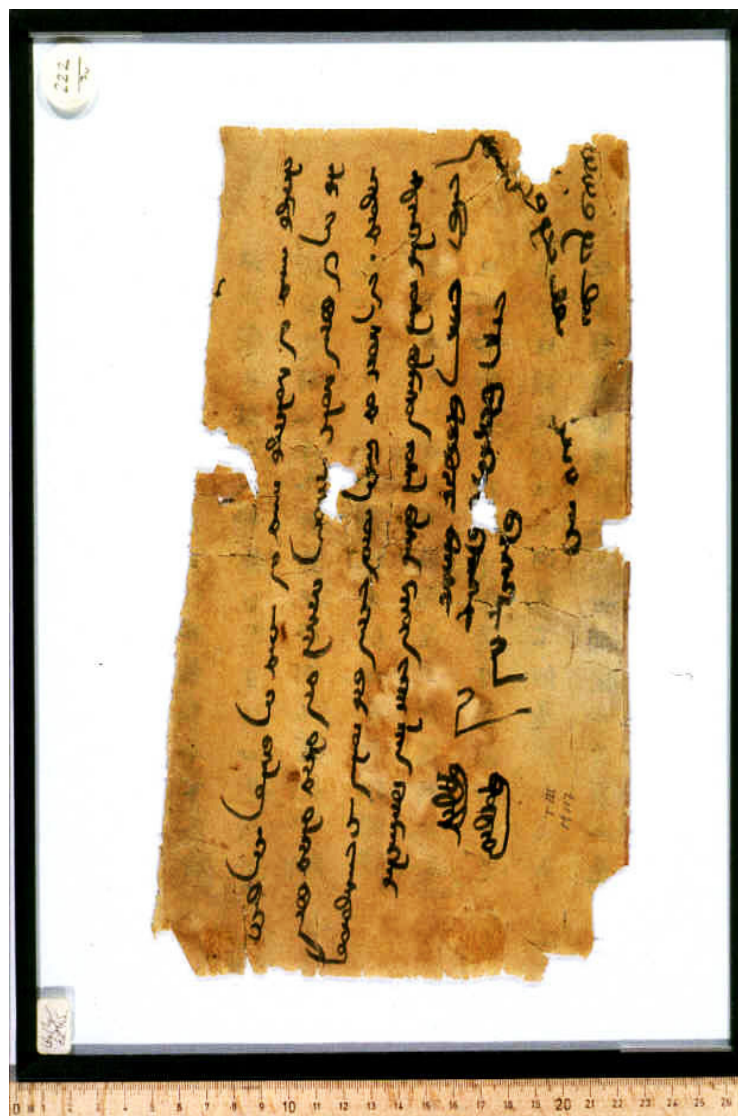
その一方で、この「寧戎寺」は、遠隔の高昌城近辺に寺産としてブドウ園を保有していたと考えることもできる。類似の例として、やはり唐代に遡るが、某人がベゼクリク石窟の仏教教団に「州城常田捌畝」を布施し、「州城」つまり高昌城の「妙徳寺」に「僧院壹所」を造ったことなどを記念する「唐貞元六年(790)西州造寺功德碑」が、ベゼクリク石窟で発見されている〔柳洪亮 1990, pp. 60-61〕。また、西ウイグル時代の事例として、トヨク石窟を活動拠点とするウイグル仏教徒集団が、約 15 km 南方の都市ルクチュン(魯克沁 < Lukčün ~ 魯古塵 < Uig. Lükčüng < Chin. 柳中) 所在の田地を寄進され、寺院経営に運用していたことが、いわゆるトゥドウム＝シェリ (Tudum-šäli) 修寺碑から知られる〔松井 2004b, p. 67〕。

いずれにせよ、本資料(F)の「寧戎寺」は、ある程度に具体的な地理情報を含んでいるという点で、モンゴル時代のウイグル仏教寺院の経済基盤や、それに対する公的な物資徴発システム・税役システムの実態像を考察していく手がかりとなり得るものである。

### 資料(G) Ch/U 6245v (T III M 117) 【Fig. G】

ドイツ隊収集、ベルリン所蔵のウイグル語文書で、草書体の書簡である。まず Zieme により文書の概要が簡単に紹介され〔Zieme 1976, p. 248〕、最近の Simone-Christiane Raschmann のベルリン所蔵世俗文書目録でも解説されているが〔VOHD 13,21 #156〕、これまでに全体の校訂テキストは提出されていない。

Fig. G



Ch/U 6245 v

Depositum der Berlin-Brandenburgischen Akademie der Wissenschaften  
in der Staatsbibliothek zu Berlin - Preussischer Kulturbesitz, Orientabteilung



1 qlimdu aqam-qa šulaydu aqam-qa 'āčim-kä başlap 'āv-ḏäki-  
 2 -lär-kä män buyan quli nišüng qisil-tin tälīm tälīm buyan  
 3 ayıdım • yan-a sözüim manga üç yangıqa bir ulay-nı yaraşdurup  
 4 iḏinglar osal bolmaşun osal bolsar mintin yavız-lıq körmänglär  
 5 yamu yang birgüči baxşı  
 6 yang birgüči baxşı qa bitdim  
 7 baxşı-qa bitdim  
 8 (.....) ay  
 9 ud yıl bişinč  
 10 ud yıl bişinč

①私の兄カリムドウへ、私の兄シュライドウへ、私の兄へ、さらに家族②たちへ。私ブヤン＝クリが、寧戎峡谷から、幾多の福德（とともに）③お伺いします。さて申し上げます：私に、初（旬の）三日（まで）に1頭の駄獣を準備して④送ってください。怠慢のありませんように。（私に？）怠慢があれば（あっても？）、私からの悪事を見ないで下さい⑤ね。

見本（儀礼？）を授ける師 ⑥⑦見本（儀礼？）を授ける師に  
 私は書きました。

⑨⑩牛年第五（月）

**【語註】 G1, qlimdu:** この人名 Q(a)limdu ~ Qalimdu は頻出する [BT II, p. 60; SUK 2, p. 272]. 漢語の仏教用語に -du (< Chin. 奴) を付した仏教的人名 [cf. Zieme 1994] であることは確実だが、Qalim の原語についてはこれまで明解がない。 **G1, šulaydu:** < Chin. 如来奴。 **G2, nišüng qisil:** Raschmann は 'YSWNK と転写して地名とみなし、BT XIII, Nrn. 59, 60 (=本稿資料(A)・(B)) の用例に言及するにとどまったが、訂正すべきである。 **G3, üç yangıqa:** 本

処の yangïqa について, Zieme は不明語 yangïq としつつ, yariq 「鎧, 鎖帷子 (Panzer)」の可能性をも指摘した. Raschmann はこれを採用しつつ, さらに üč yangïqa 「初三日」と解釈する可能性も残していた. 筆者は, Osman Fikri Sertkaya 教授から「初 (旬の) 三日 (まで) に」と解釈する方がよいというご教示をいただいたので, それに従いたい. 期日を特定して種々の物件を差出人に送るよう依頼・指示するウイグル語書簡の例としては, 大英図書館所蔵の Or. 12452 (B) 9 (旧番号 M. B. V. 02) [*Innermost Asia* III, pl. 126] が挙げられる. この書簡では, 「今月の二十日に宴会をすることになった (ǵbu ay-ning yägrmi-kä toy bolıu ǵboldı)」ため, 花盤 (Chin. > Uig. qapan) や盃 (ayaq) など種々の物品を持参するよう求めている. **G4, osal bolmaşun:** この表現については, 森安 2011, pp. 28, 65 を参照. なお, 本処に後続する「怠慢があれば」以降の文脈は解釈困難である. **G5,6, yang birgüči baxşı:** Chin. 様から借用された Uig. yang は, 「型紙, 見本」[Zieme 1995, p. 5; Zieme 1998, pp. 65-66; 松井 2004b, p. 45] のほかに「儀礼, 儀式」[BT VII, p. 101] の意もある. 本処ではどちらをさすのか定めがたい. ちなみに, トヨク出土のウイグル語書簡 (Ch/U 7426) には, ウイグル仏僧が金剛力士 (Vačirapan) の見本 (yang) と塑像 (körki) を取り寄せようとする文言がみえる [Zieme 1995, pp. 3, 5]. **G6-10:** この部分は習書・雑記となっており, 文脈をなさない. また, 第 9-10 行の「牛年第五」は, 上下逆に記されており, その下 (料紙の中央部分) にも習書とおぼしき残画がある.

さて, 上述の校訂テキストからも, 本文書が書簡として完結していないことは明らかである. また, ベルリン所蔵の原文書にも, 発送時に折りたたまれた形跡はみえない. すなわち, 本文書は, 実際には発信されなかった草稿とみなされる. そして, 第 2 行にみえる発信地「寧戎峡谷 (Nišüng qisıl)」が, 資料 (A) の「寧戎阿蘭若の峡谷 (Nišüng aryadan qisıl)」と同じく, ベゼクリク石窟をさすことは明瞭である. これに対し, 本文書の出土地番号 T III M 117 からは, 本文書がムルトウク (Murtuq) で獲得されたことが示唆される [Zieme 1976, p. 248; VOHD 13,21, p. 18]. ただし, Grünwedel らドイツ隊が調査地点と

していう“Murtuq”とは、ベゼクリク石窟からムルトウク河を約 4.0 km ほど北上した地点に位置するウジャン＝ブラク (Ujan-bulaq > 烏江不拉克, Stein のいう Murtuk Ruin) 遺跡群とベゼクリク石窟 (Stein のいう Bezeklik Temple Ruins) とを総称したものであることが、各国のトゥルファン探検の調査資料と衛星写真との比較検討から解明されている [西村・北本 2010, pp. 224-240]. 従って、本文書の出土地番号にみえる M = Murtuq は——ドイツ隊が本文書を現地住民から購入したのでなければ——実際にはベゼクリク石窟をさしたものであったと考えることができる。

ところで、“Murtuq”の出土地番号を与えられたドイツ隊将来のウイグル語出土文献には、現在のムルトウクの語源となった Murut-luq<sup>すも</sup>「李・梨のあるところ」という地名も在証される<sup>(17)</sup>。特に、“Murtuq”将来の2件の免税特許状 U 5317 (= T III M 205), U 5319 (= T III M 205c) は、この地名に由来する「ムルトルク阿蘭若 (Murutluq aryadan)」が西ウイグル政権から免税特権を賦与されるほどの有力な仏教寺院であったことを示唆する [Zieme 1981, Texts A & B; 森安 1991, pp. 134-137; 松井 2004c, fn. 9; Matsui 2006, p. 38].

それでは、このムルトルク阿蘭若と、“Murtuq”発現の資料 (G) に在証される「寧戎峡谷」＝ベゼクリク石窟寺院とはいかなる関係にあったのだろうか。この問題を、次の資料 (H) から考えることとする。

#### 資料 (H) 韓国国立博物館 No. 4049 [Figs. H1, H2, H3]

Grünwedel 番号ベゼクリク第4窟から大谷探検隊が将来した壁画断片で、誓願図の一部を構成していた供養菩薩像である。像の向かって右側の白枠内に、草書体のウイグル銘文1行が缺損部をまたいで記される。梅村坦・関炳勲により、写真複製と校訂テキストが提示されている [梅村・関 1995, p. 138 & pl. 13].

---

(17) ウイグル訳玄奘伝には Uig. murut = Chin. 棠梨 (*Malus sieboldii rehd*) の対応例が在証され、またウイグル訳『千字文』には murut = 李の対応がみられる。ペルシア語 murt はテンニンカ (桃金娘, *Rhodomyrtus tomentosa*)、現代トルコ語 murut はギンバイカ (*Myrtus communis*) をさす [Zieme 1981, pp. 242-243; 庄垣内 2003, pp. 122-123].

Fig. H1



Fig. H2



圖13-1

Fig. H3



圖13-2

**No. 4049** 韓國國立博物館  
After 梅村・関 1995, pl. 13

murudtuq qizil-tin män X(..) [ (W) yoq üčün 'ämğanip bartim  
ムルトウク峡谷から、私……………が無い故に、苦しみつつ行った。

【語註】 H1, **Murudtuq**: Murutluq の変異形式とみる。 H1, (W) **yoq**: 梅村・関は, [...]pyuq と転写して、何らかの動詞の完了形 (-yuq 「～した」) と解釈した。しかし、写真からは YWX の直前の文字は語末形の -W のようにもみえるので、あえて改める。

注目すべきは、冒頭の「ムルトウク峡谷 (Murudtuq qisil)」という表現である。すでにみたように、資料 (A) には「寧戎阿蘭若の峡谷 (Nišüng aryadan qisil)」, 資料 (G) には「寧戎峡谷 (Nišüng qisil)」という表現がみえ、これらは明らかにベゼクリク石窟をさしていた。資料 (A)・(G)・(H) はいずれも草書体のウイグル語銘文であり、13～14 世紀のモンゴル帝国期に年代比定される点ではほぼ同時代に属するといえる。この時期に、ベゼクリク石窟に「寧戎峡谷」・「ムルトウク (ムルトルク) 峡谷」という両様の呼称が与えられていたとは考えづらい。

また、資料 (H) で「ムルトウク峡谷」に尊格語尾 -tin 「～から」が付されていることも重要である。この尊格語尾を梅村・関は銘文の書き手である「私」の出生地と解釈したが、筆者は、「私」がムルトウク峡谷「から」ベゼクリク石窟を訪れたことを示すもの<sup>(18)</sup>と考える。これを換言すれば、ムルトルク～ムルトウクとベゼクリク＝寧戎 (Nišüng ~ Lišüng) とは、石窟寺院としては別のものであると、当時のウイグル人によって認識されていたことになる。

ちなみに、語註 G3 で言及した大英図書館所蔵ウイグル語書簡 Or. 12452 (B) 9 は、旧番号 M. B. V. 02 が示すように、Murtuk Ruins の遺址群の 1 つ M. B. から発掘されたものである [Innermost Asia III, pl. 126]. この書簡は草書体で書かれており、末尾にはニシャン印 (nišan, 略花押) もみえることから、モンゴル

(18) ウイグル語の壁画銘文や題記類において、書き手の出身地や居住地を示す場合には接尾辞 -luγ / -lūg が用いられるのが一般的である [ATG, p.65, §77; OTWF, pp. 143-144; 松井 2004b, pp. 53, 62, 67-68].



時代に属することは確実である。またこのニシャン印から、この書簡は草稿ではなく実際に発送されたものと考えてよい。そして、この書簡の宛先は「峡谷の人たち (qīsīl-līγ-lar)」と称されている。すなわち、当時のウイグル住民は、Stein の Murtuk Ruins すなわち現在のウジャン＝ブラク遺跡群の位置する一帯を、確かに「峡谷 (qīsīl)」と称していたのである。筆者は、このウイグル語書簡の「峡谷 (qīsīl)」が資料(H)の「ムルトウク峡谷 (Murudtuq qīsīl)」に相当するものとする。また、Stein の Murtuk Ruins = 現在のウジャン＝ブラク遺跡群には、ベシュガル (Beš-ghar > 拝錫哈～拝西哈爾, バイシハル) 石窟寺院 (Grünwedel の調査した Murtuq, 2. Anlage に相当する) や、仏塔・烽火台の遺構なども含まれており [西村・北本 2010, pp. 231-233], モンゴル時代に至っても相当規模の仏教教団がここに存在したと想定される<sup>(19)</sup>。前述のムルトルク阿蘭若 (Murutluq aryadan) 寺院も、この一帯に位置していたものかもしれない。

(19) ベシュガル石窟のうち、第3窟の前室左(東)壁に、明らかにモンゴル期に属するウイグル語銘文が存在することは、吉田豊により報告されている [吉田 1991, p. 58]。筆者は 2007 年 8 月にベシュガル石窟を訪問し、問題の銘文を調査することができた。この銘文はタテ約 15 cm, ヨコ約 30 cm のスペースに全 20 行が記されるが、中央部分の破損が著しく、第 3～18 行はほとんど判読できない。冒頭・末尾の判読可能部分の校訂案は次の通り： 1ymä [qutluγ taviš]γan yil 2bišinč [ay .....](.) biz yigči(?) bu 3-18..... 19[.....] küsüšüm 20tärk ök (.)[..... qa]nzun 「①さて [幸いなる] 兔」年 ②第五月 [□日]に。私たちイグチ?が、この【……③～⑬判読不可……】⑭……私の望みが⑮まさに速やかに…… [満た] されますように」。さらに、この銘文の向かって右側にある計 7 段の観相図のうち、上から 3～7 段目にもウイグル銘文がある。その多くも摩滅しているが、以下に判読できた部分を示しておく：5 段目 (全 9 行)：1küskü yil T(..)[.....] 2[ay ..... o](t)uz-3[qa .....] 「鼠年第 [四/九] 月二十 □日 [に]」；6 段目 (全 2 行)：1taz inanč (...) [.....] 2[yu]nt yil altinč [.....] 「タズ＝イナンチ……馬年第六月……」；7 段目 (全 3 行)：1bu altinč ay üč 2otuzqa ol 3uluš (...) 「この第六月二十三日に、その国……」。これらの銘文は、やはりウイグル人仏教徒が巡礼の記念に書き残したものとみられ、ベシュガル石窟を含む一帯が「ムルトウク峡谷」として、「寧戎峡谷」と同様にウイグル人仏教徒の聖地となっていたことを示唆する。

## 資料 (I) \*U 9053 [Fig. I]

この文書はドイツ探検隊の収集資料であるが、第二次大戦中に紛失して現存しない。ただし、第二次大戦前に Arat が撮影した写真複製がイスタンブル大学に残されており、その写真に基づく校訂テキストを Osman Fikri Sertkaya が提示している [Sertkaya 2006b, p. 198, Metin IV]。なお、\*U 9053 という番号は、ベルリン科学アカデミーによって与えられている整理番号である [VOHD 13,22 #575]。幸いに、筆者は、Sertkaya 教授のご好意により、当該の写真複製を調査のうえ、本稿で公刊することを許可された [Fig. I]。この場を借り、同教授に深謝したい。

- 1        ča-γan yīl altīnč ay bir yangīqa
- 2        {(.)WY(. )WP}
- 3        lišūng-tā turup
- 4        namo budy-a nmo țarmy-a

①庚 年第六月初（旬の）一日に、③寧戎に滞在して

④南無仏・南無法

【語註】 **I1, ča-γan yīl:** ča-γan については、「白、白い」の他に十干の「庚」をも意味するモンゴル語 čaγan [MKT, p. 1226] の借用とみなし、本来 yīl「年」の前に記すべきだった十二支獣を誤脱したものと、かりに考えておく。とはいえ、これだけがモンゴル語で記されるのはいかにも奇妙であり、他の解釈もあり得る。 **I1, ay:** 実際には独立形の aleph のみで記されている。

**I1, yangīqa:** 語末の aleph は左方向に伸ばされている。また、この語の左側には、ta rma ra(?) sa と判読できるブラーフミー文字がある<sup>(20)</sup>。 **I2:** 抹消

---

(20) このブラーフミー文の判読については、橘堂晃一・笠井幸代・荻原裕敏 3 氏にご協力いただいた。特記して深謝する。

Fig. I



**\*U 9053**

Reproduced by courtesy of Prof. Dr. Osman Fikri Sertkaya (Istanbul)

されている。次行の Lišüng = LYSWNK もしくは turup = TWRWP の誤記であろう。 **I3, lišüng:** 字形は LYSWK のようにみえ、Sertkaya も lešük と転写したが、LYSW(N)K = Lišü(n)g ~ Lišüng 「寧戎」とみることに問題はない。

**I4:** Sertkaya も指摘するように、三帰依文の「南無僧 (namo sanggay-a < Skt. namaḥ saṃghāya)」は書かれていない。また、budy-a 末尾の aleph と後続の n(a)mo の右隣には、それぞれ YM = ym[ä], YM' = ymä と判読できる小字のウイグル文が上下逆に書かれている。

Sertkaya は第 1 ~ 3 行を法律文書の冒頭部分とみなした。しかし、第 4 行の三帰依文も第 1 ~ 3 行と同筆であることに鑑みれば、このウイグル文は「寧戎 (Lišüng)」すなわちベゼクリク石窟寺院に滞在した巡礼者による記念の題記とみなすべきであろう。従って、この文書の出土地番号は不明ながら、やはりベゼクリク石窟から将来されたものと推測できる。

## おわりに

以上、本稿では、ウイグル語諸資料にみえる Nižüng ~ Nišüng ~ Lišüng を漢語「寧戎」の音写とみなしつつ、それが明らかにベゼクリク石窟をさしている用例を確認した。また、ベゼクリク石窟をさすものとは即断できない用例についても、歴史地理学的に検討してきた。今後、この地理比定を基盤として、新発現資料・新公開資料の歴史的背景の分析と内容理解を進めていく必要がある。

## 略号表・文献目録

安部 健夫 1955:『西ウイグル国史の研究』彙文堂書店。

ABK = Albert Grünwedel, *Altbuddhistische Kultstätten in Chinesisch-Turkistan*. Berlin, 1912.

AoF = *Altorientalische Forschungen*

荒川 正晴 1986:「麴氏高昌国における郡県制の性格をめぐって」『史学雑誌』95-3, pp. 37-74.

ATG = Annemarie von Gabain, *Alttürkische Grammatik* (3. ed.). Wiesbaden, 1974.

BSA = Albert von Le Coq, *Die Buddhistische Spätantike in Mittelasien*, 7 vols. Berlin, 1922-1926.

- BT II = Klaus Röhrborn, *Eine uigurische Totenmesse*. Berlin, 1971.
- BT V = Peter Zieme, *Manichäisch-Türkischer Texte*. Berlin, 1975.
- BT VII = Georg Kara / Peter Zieme, *Fragmente tantrischer Werke in uigurischer Übersetzung*. Berlin, 1976.
- BT XIII = Peter Zieme, *Buddhistische Stabreimdichtungen der Uiguren*. Berlin, 1985.
- BT XVI = Dalantai Cerensodnom / Manfred Taube, *Die Mongolica der Berliner Turfansammlung*. Berlin, 1993.
- BT XXVI = Kasai Yukiyo 笠井幸代, *Die Uigurischen Buddhistischen Kolophone*. Turnhout, 2006.
- Chotscho = Albert von Le Coq, *Chotscho*. Berlin, 1913.
- ED = Gerard Clauson, *An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth Century Turkish*. Oxford, 1972.
- Erdal, Marcel. 2004: *A Grammar of Old Turkic*. Leiden.
- ETŞ = Reşid Rahmeti Arat, *Eski Türk şiiri*. Ankara, 1965.
- Gabain, Annemarie von. 1964: Die alttürkische Literatur. In: L. Bazin et al. (eds.), *Philologiae Turcicae Fundamenta* II, Wiesbaden, pp. 211-243.
- GSR = Bernhard Karlgren, *Grammata serica recensa*. Stockholm, 1957.
- Hamilton, James. 1958: Autour du manuscrit Staël-Holstein. *T'oung Pao* 46-1/2, pp. 115-153.
- Hamilton, James. 1962: *Toquz-oyuz* et *On-uyğur*. *Journal Asiatique* 250, pp. 23-63.
- Hamilton, James. 1984: Les titres *şäli* et *tutung* en ouïgour. *Journal Asiatique* 272, pp. 425-437.
- Hamilton, James / Niu Ruji 牛汝極 1998: Inscriptions ouïgoures des grottes bouddhiques de Yulin. *Journal Asiatique* 286, pp. 127-210.
- 橋本 貴子 2004: 「トゥルフアン出土の難字音注断片に反映されるウイグル漢字音について」『アジア言語論叢』5, pp. 17-44.
- Innermost Asia* = Aurel Stein, *Innermost Asia*, 4 vols. London, 1928.
- 片山 章雄 1981: 「Toquz oyuz と「九姓」の諸問題について」『史学雑誌』90-12, pp. 39-55.
- 百済 康義 1994: 「ベゼクリク壁画から見た西域北道仏教の一形態」『キジルを中心とする西域仏教美術の諸問題』（仏教美術研究上野記念財団助成研究会報告書 22）京都国立博物館, pp. 1-26.
- Le Coq, Albert von. 1926: *Auf Hellas Spuren in Ostturkistan*. Leipzig.
- 柳 洪亮 1986: 「柏孜克里克石窟年代試探」『敦煌研究』1986-3, pp. 58-67.
- 柳 洪亮 1990: 「高昌碑刻述略」『新疆文物』1990-4, pp. 59-68.
- 柳 洪亮 1997: 『新出吐魯番文書及其研究』新疆人民出版社.
- 松井 太 1998: 「ウイグル文クトルグ印文書」*SIAL* 13, pp. 1-62, +15 pls.
- 松井 太 2004a: 「モンゴル時代の度量衡」『東方学』107, pp. 166-153.



- 松井 太 2004b:「シヴシドゥ・ヤクシドゥ関係文書とトヨク石窟の仏教教団」森安孝夫(編)『中央アジア出土文物論叢』朋友書店, pp. 41-70.
- 松井 太 2004c:「モンゴル時代のウイグル農民と仏教教団」『東洋史研究』63-1, pp. 1-32 (r.p.).
- Matsui Dai 松井 太 2006: Six Uigur Contracts from the West Uigur Period (10th-12th Centuries). 弘前大学人文学部『人文社会論叢』人文科学篇 15, pp. 35-60.
- Matsui Dai 松井 太 2007: An Uigur Document Preserved in the Library of Istanbul University. SIAL 22, pp. 61-70.
- 松井 太 2008a:「東西チャガタイ系諸王家とウイグル人チベット仏教徒」『内陸アジア史研究』23, pp. 25-48.
- Matsui Dai 松井 太 2008b: Revising the Uigur Inscriptions of the Yulin Caves. SIAL 23, pp. 17-33.
- Matsui Dai 松井 太 2010a: Uigur Manuscripts Related to the Monks Sivšidu and Yaqšidu at “Abita-Cave Temple” of Toyoq. 新疆吐魯番學研究院(編)『吐魯番學研究: 第三屆吐魯番學暨國歐亞游牧民族的起源與遷徙國際學術研討會論文集』上海古籍出版社, pp. 697-714.
- 松井 太 2010b: (廣中智之: 譯)「吐魯番出土回鶻文書中所看到的七康湖和其灌溉」『吐魯番學研究』2010-1, pp. 79-81.
- MKT = 『蒙漢詞典 (Mongyol kitad toli)』増訂本, 內蒙古大學出版社, 1999.
- 森安 孝夫 1990:「ウイグル文書割記 (その二)」『内陸アジア言語の研究』5 (1989), pp. 69-89.
- 森安 孝夫 1991:『ウイグル = マニ教史の研究』(『大阪大学文学部紀要』31/32).
- 森安 孝夫 1997:「オルトク (幹脱) とウイグル商人」森安孝夫(編)『近世・近代中国および周辺地域における諸民族の移動と地域開発』科学研究費成果報告書 (No. 07451082), 大阪大学文学部, pp. 1-48.
- Moiryasu Takao 森安 孝夫 2004: *Die Geschichte des uiguerischen Manichäismus an der Seidenstraße*. Wiesbaden.
- 森安 孝夫 2011:「シルクロード東部出土古ウイグル手紙文書の書式 (前編)」『大阪大学大学院文学研究科紀要』51, pp. 1-86.
- 乚小紅 2006:『唐五代畜牧經濟研究』中華書局.
- 西村 陽子・北本 朝展 2010:「スタイン地図と衛星画像を用いたタリム盆地の遺跡同定手法と探検隊考古調査地の解明」『敦煌写本研究年報』4, pp. 209-245.
- OTWF = Marcel Erdal, *Old Turkic Word Formation*, 2 vols. Wiesbaden.
- PTB = Gosudarstvennyi Ėrmitaž, *Peščery tysjači budd*. Sankt-Peterburg, 2009.
- 榮 新江 1987:「吐魯番の歴史與文化」胡戟(編)『吐魯番』三秦出版社, pp. 26-85.

- Sertkaya, Osman Fikri. 2006a: Hukukî Uygur belgelerindeki para birimleri üzerine. In: O. F. Sertkaya & R. Alimov (eds.), *Eski Türklerde para*, Istanbul, pp. 117-137.
- Sertkaya, Osman Fikri. 2006b: Eski Uygur Türkçesi metinlerinde karalamalar ve müsveddeler. In: Y. Çoruhlu et al. (eds.), *Orta Asya'dan Anadolu'ya Türk sanatı ve kültürü. Prof. Nejat Diyarbekirli'ye armağanı*, Ankara, pp. 195-200.
- 嶋崎 昌 1959: 「高昌国の城邑について」『中央大学文学部紀要』史学科 5.
- 嶋崎 昌 1983: 『隋唐時代の東トウルキスタン研究』東京大学出版会.
- 庄垣内 正弘 1982: 『ウイグル語・ウイグル語文献の研究 I』(神戸市外国語大学研究叢書 12) 神戸市外国語大学外国学研究所.
- 庄垣内 正弘 1987: 「ウイグル文献に導入された漢語に関する研究」SIAL 2 (1986), pp. 17-156.
- 庄垣内 正弘 2003: 『ロシア所蔵ウイグル語文献の研究』京都大学大学院文学研究科.
- 庄垣内 正弘 2008: 『ウイグル文アビダルマ論書の文献学的研究』松香堂.
- SIAL = 『内陸アジア言語の研究 (Studies on the Inner Asian Languages)』
- SUK = 山田信夫 『ウイグル文契約文書集成 (Sammlung uigurischer Kontrakte)』全 3 巻, 小田壽典・P. Zieme・梅村坦・森安孝夫 (編), 大阪大学出版会, 1993.
- 高田 時雄 1988a: 「コートン文書中の漢語語彙」尾崎雄二郎・平田昌司 (編) 『漢語史の諸問題』京都大学人文科学研究所, pp. 71-128.
- 高田 時雄 1988b: 『敦煌資料による中国語史の研究』創文社.
- 『吐魯番文物精粹』= 李蕭・侯世新・張永兵 (編) 『吐魯番文物精粹』上海辭書出版社, 2006.
- 梅村 坦・関 丙勲 1995: 「國立中央博物館藏 Bezeklik 壁畫 Uigur 銘文試釋」『美術資料』55, pp. 119-155.
- VOHD 13,21 = Simone-Christiane Raschmann, *Alttürkische Handschriften* 13, Dokumente, Teil 1. Stuttgart, 2007.
- VOHD 13,22 = Simone-Christiane Raschmann, *Alttürkische Handschriften* 13, Dokumente, Teil 2. Stuttgart, 2009.
- 王 素 2000: 『高昌史稿: 交通編』文物出版社.
- 山田 信夫 1968: 「イスタンブル大学図書館所蔵東トルキスタン出土文書類」『西南アジア研究』20, pp. 11-29, +pls. 31-32.
- 山田 信夫 1976: 「カイイムトゥ文書のこと」『東洋史研究』34-4, pp. 32-57.
- 吉田 豊 1991: 「新疆維吾爾自治区新出ソグド語資料」SIAL 6 (1990), pp. 57-83.
- 吉田 豊 1994: 「ソグド文字で表記された漢字音」『東方学報』京都 66, pp. 380-271.

- Yoshida Yutaka 吉田 豊 2000: Further Remarks on the Sino-Uighur Problem. 『アジア言語論叢』 3, pp. 1-11.
- 吉田 豊 2009: (書評) 庄垣内 2008. 『仏教学セミナー』 90, pp. 45-62.
- Zhang Huiming 張 惠明 / Maria L. Rudova / Nikolai G. Pčelin. 2007: Inventaire des pièces de Turfan conservées au Musée de l'Ermitage. In: J.-P. Drège & O. Venture (eds.), *Études de Dunhuang et Turfan*, Droz, pp. 411-448.
- Zieme, Peter. 1976: Zum Handel im uigurischen Reich von Qočo. AoF 4, pp. 235-249.
- Zieme, Peter. 1980: Uigurische Pacht Dokumente. AoF 7, pp. 197-245, +Taf. III-XII.
- Zieme, Peter. 1981: Uigurische Steuerbefreiungsurkunden für buddhistische Klöster. AoF 8, pp. 237-263, +Taf. XIX-XXII.
- Zieme, Peter. 1994: Samboqdu et alii. Einige alttürkische Personennamen im Wandel der Zeiten. *Journal of Turkology* 2-1, pp. 119-133.
- Zieme, Peter. 1995: An Uigur Monasterial Letter from Toyoq. SIAL 10, pp. 1-7.
- Zieme, Peter. 1998: Turkic Fragments in 'Phags-pa Script. SIAL 13, pp. 63-69, +2pls.
- Zieme, Peter (forthcoming): A Brahmanic Siddha Painting from Bāzāklīk in the Hermitage of St. Petersburg and Its Inscriptions. In: *Proceedings of the 53rd Annual Meeting of the Permanent International Altaistic Conference, July 25-30, 2010, St. Petersburg. Unknown Treasures of the Altaic World in Libraries, Archives and Museums.*

**【付記】** 本稿は科学研究費（基盤研究 (A) ・基盤研究 (B) ・基盤研究 (C)）による研究成果の一部である。